

エコノミーと戦略 ——デリダの脱構築における資源（リソース）の問題——

Economy and Strategy:
The problem of resource in Derrida's deconstruction

亀井 大輔*

はじめに

本ワークショップのテーマである「エコノミー」は、間文化的考察にとって避けて通ることのできない主題である。ある文化と他の文化の混交は、人、物などの移動とともに同時に何らかの交易や経済活動の次元を伴うからである。経済の次元は、とりわけ現代の国際的状況にとって重要な問題であり、それは現代の間文化性のあり方にもけっして無関係ではないだろう。確かに、哲学や現象学によって間文化性へとアプローチすることは、経済学的な考察とは異なる。しかし、エコノミーという概念を考察するという手段で、この問題へと接近することも可能だろう。近年、「エコノミー」の概念に注目が集まるようになり、思想史的な解明もなされつつある¹⁾。

本稿では、こうした動向を背景にして、フランスの哲学者ジャック・デリダにおける「エコノミー」の概念に焦点を当ててみたい。この概念は間文化性の問題と密接に関わる。なぜなら、以下の本論で明らかになるように、この概念は（とりわけ前期の）デリダにとって、西洋の形而上学の閉域が、必然的に外部へと開き、他性の侵入に曝されていることを思考するために必要とされた概念だからである。

* 立命館大学文学部准教授

デリダは、西洋の形而上学の脱構築を自らの思想的課題とするとき、西洋／東洋の文化的相違にかんする何らかの知見を参照している。たとえば『グラマトロジーについて』でエクリチュールの議論を展開するとき、西洋と東洋の言語の違いについて、次のように述べている。

しかし、ずっと以前から知られているように、実質的には非・表音的である中国や日本の文字（エクリチュール）は、ごく早くから表音的要素を伴っていた。この要素は、構造的にはなお表意文字に、つまり代数学的体系に支配されている。かくしてわれわれは、あらゆるロゴス中心主義の埒外で展開される一つの文明の強力な運動を眼のあたりにする。
(DG137f./上 189)

このようにデリダは、言語にかんする西洋と東洋の差異に即して、ロゴス中心主義はヨーロッパ的なものであるのに対して、音声中心主義は普遍的なものだと述べる²⁾。とはいえ、東洋にロゴス中心的な要素がないかどうかは検討の余地があるだろう³⁾。そもそも、デリダが依拠する中国や日本の文字についての研究は、ヨーロッパから東洋を見たヨーロッパ的な言説であり、すでにそのなかにヨーロッパ中心的な偏向があるとは言えないだろうか。

このことに関して、デリダはレヴィ＝ストロースの民族学を批判的に論じるにあたって、次のように述べていた。

ところで、民族学は——あらゆる科学と同様に——言説という境位のなかで産み出される。そして、民族学はまず最初はヨーロッパの科学であり、やむをえずとはいえ伝統に属する諸概念を使用する。したがって（…）彼〔レヴィ＝ストロース〕がまさに民族中心主義を告発する瞬間に、彼は自分の言説のなかで、民族中心主義の諸前提を受け入れてしま

うのである。(ED414/572)

デリダがこのように述べる時、それはレヴィ＝ストロースだけでなく、彼自身の言説にも、ひいては彼の脱構築の企てにも当てはまるのではないだろうか？ ——まさに当てはまる、とデリダは考えたように思われる。つまり、デリダは、ヨーロッパの伝統の内部でヨーロッパの外部を思考せざるをえないことを、自らのアポリアとして受け止めていたのである。

ヨーロッパのなかで受け継がれた伝統や遺産は、思考や言説の形成のために依拠し、活用することができる「資源（リソース）」である。それはいくら汲んでも汲みつくせないほど豊かで奥深いものだろう。にもかかわらず、それがヨーロッパの伝統である限りにおいて、その資源には一定の限界があることになる。脱構築のために、有限な資源をいかに活用するか——この問題に直面したとき、デリダは「エコノミー」の思考を開始した。本論では、その経緯を辿り、デリダの「エコノミー」概念ならびにそれと同時に進行する「戦略」の形成を明らかにし、最後に「差延」の思考にそれがいかに反映されているかを見定めたい。

1 資源（リソース）の問題

まず、デリダのエコノミー論の出発点にある脱構築における「資源（リソース）」の問題とはいかなる問題であるのか、そこからエコノミー論がどのように登場したのか、その経緯を明らかにしておきたい。そのために、デリダの初期のテキストにおいて「エコノミー」という語が導入された事情を確認することから始める。というのも、この語についてはテキスト事情が複雑だからである。1967年に公刊された三著作から『エクリチュールと差異』に絞ってみれば、この著作に収録された諸論文のうち、最初の論文「力と意味」（1963年初出）と第二論文「コギトと狂気の歴史」（1964年初出）にお

いてすでに、重要な箇所ではエコノミーの語が登場している。しかし、すでに指摘されているように⁴⁾、これらの論文の雑誌掲載時のバージョンにはエコノミーの語を含む箇所はまだ存在せず、それらは1967年に加筆された箇所である。

したがって、デリダのテキストにおいてこの語が最初に用いられたのは「暴力と形而上学」(1964年初出)であると目される(ただし、1967年の加筆において新たにこの語を含む文章が追加されているので、やはり事情は複雑である⁵⁾)。このレヴィナス論において、デリダのレヴィナス批判の要点のひとつとして打ち出される議論が、周知のように「暴力のエコノミー」の議論なのである。これがデリダの「エコノミー」の語法の出発点にあたるとうることができるだろう。

その内実を確認しておけば、デリダにとって、レヴィナスの『全体性と無限』は、ギリシア的ロゴスにもとづく哲学的言説を沈黙させることによって、ギリシア的ロゴスでは表現できない他なるものとの関係を実現するという仕方で、メシア的平和を志向する議論のように映る。それに対し、デリダは、哲学的言説を沈黙させることはまた別の暴力の行使にほかならないため、そのように志向される平和は最悪の暴力に転化する恐れがあるので、あくまでも哲学的言説のなかで平和を目指すべきだと主張する。つまり、全体化の暴力をふるう言説に対して、同じ言説で対抗することで平和を目指すこと、これが「暴力のエコノミー」と呼ばれる。「……言語は、戦争をみずからのうちで承認し実践することで、正義へと無際限に向かうことしかできない。暴力に抗する暴力。暴力のエコノミー」(ED172/228)。

したがって、このエコノミーという語が含意するのは、言語に言語以外のものを対抗させることや、言語それ自体を抹消することではなく、言語に言語を対抗させること、つまり言語の循環である。デリダが強調しているのは、言語それ自体が暴力的なものであり、「論争 (polémique)」(ED173/230)であることを承認すること、「戦争が哲学的ロゴスに住まっており、しかし、この

哲学的ロゴスのなかでのみ平和を宣言できるのだということ」(ED173/227)である。

こうした主張には、デリダの脱構築のスタンスがすでに予示されている。というのも、ギリシア的ロゴスの批判というレヴィナスのモチーフは、デリダの脱構築へと受け継がれていくことになるが、そのさいデリダが前提とするのは、レヴィナスのようにギリシア的ロゴスから完全に手を切ることは不可能であるのだから——レヴィナスはギリシア的ロゴスの言語を語ることでギリシア的ロゴスから手を切ろうとしたため、矛盾に陥ってしまった、というのがデリダの批判点である——、伝承されてきたロゴスによってロゴスを批判するしか方途はないということだからである。初出の用法における「エコノミー」とは、こうしたデリダの立場を表す言葉とみなすことができる。

まさにこの議論のなかで問われているものは、脱構築における「資源（リソース）」の問題にほかならない。すなわち、以上の内容は、〈哲学的ロゴスの脱構築において、脱構築すべき当の対象であるところのひとつの伝統から、脱構築のための言語的「資源」を汲み上げるしかない〉という必然性なのである。

デリダはこの時期、この問題を「言語の問題」と名づけて、議論の中核に据えていた⁶⁾。「暴力と形而上学」でのデリダによれば、レヴィナスはギリシア的ロゴスを批判するにあたって「古典的資源をみずからに与えることができない」、なぜなら「言説への侮蔑」という「最良の武器」を捨てているからである(ED170/226)。また同じ時期の1964-65年の『ハイデガー』講義でも、ハイデガーに対して同じ問いを立てている。デリダによれば、ハイデガーの存在論の解体は、受け継いだロゴスを用いて「存在論のロゴスの自己解体、哲学による哲学の自己解体」に進むか、「哲学より若く、哲学より遅れて来た言語の資源、言語のある種の資源を汲んで、新たな語、新たな概念を作り上げる」かのどちらかを選択しなければならない。しかし後者の手段

は不十分である、なぜなら語や概念だけでなく新たな「構文 (syntax)」も必要だからである (HQEH55)。デリダはハイデガーの解体を、西洋の伝統から「資源」を借り、西洋の言語の全体を「隠喩」とみなすことで、存在者と区別される〈存在〉を思考しようとした、と捉える。

レヴィナスの西洋哲学への批判とハイデガーの存在論の解体をともに受け継ぐデリダもまた、西洋の伝承された言語を「資源」としながら、西洋の伝統的ロゴスを脱構築する必然性に捕らわれる。こうした資源の問題は、デリダにとって困難なアポリアをもたらしたとされる。その具体例として、デリダ独自の脱構築のアイデアが初めて明示された「グラマトロジーについて」(1965年)でこの問題が生じていることを見ておこう。たとえば彼がエクリチュール概念を新たに提示しようとしても、パロール／エクリチュールという西洋の二項対立において二次的、派生的なものとして位置づけられたエクリチュールの形而上学的概念が、必然的に回帰してくる。したがって、デリダは、新たな意味でのエクリチュール概念と、従来の意味でのエクリチュール概念との差異化をつねにおこなう必要がある。「グラマトロジーについて」では、そのために「原・エクリチュール (archi-écriture)」という表現を用いた。同様に、「痕跡」という概念を導入するさいにも、現前的な存在者が消え去った後に残された痕跡というこの言葉の通常の意味から、けっして現前者へと回付されることなく他なるものへと指示を続ける運動としての痕跡という新たな意味を区別するために、後者を「原・痕跡 (archi-trace)」や「根源的痕跡 (trace originaire)」と表記せざるをえなかった。しかしこのような表記をしたとしても、「根源的なもの／派生的なもの」という二項対立が再び回帰し、またもや形而上学概念配置のなかに捕われてしまうだろう。「グラマトロジーについて」では、こうした問題が解消されることはなかったように思われる。

しかし、デリダ自身はこの問題を明確に自覚していた。そのことが明らかに読み取れるのは、翌1966年のテキストであり、アメリカで発表されたレ

ヴィ＝ストロース論「人間科学の言説における構造、記号、遊び」である。その論述において、デリダはニーチェ、フロイト、ハイデガーといった形而上学の解体を試みる先行者の名を挙げ、彼らの言説がみな「円環」に捕われていると指摘する。

ところが、こうした解体的な言説と、それに類似した言説はどれもみな一種の円環のなかに捉えられている。この円環は比類のないもので、この円環こそが、形而上学の歴史と、形而上学の歴史の解体との関係の形式を描き出しているのである。したがって、形而上学を揺さぶろうとして、形而上学の諸概念を使うのを取りやめたとしても、**何の意味もない**ことなのだ。形而上学の歴史とは異質であるような、いかなる言語も——いかなる構文も、いかなる語彙も——われわれは用いることができない。われわれが言表するいかなる解体的命題であっても、それが異議を唱えようとする対象そのものの形式と論理のなかにいつのまにか落ちこみ、その対象そのものを暗黙のうちに仮定せざるをえないのである。(ED412/569)

デリダはこのように、解体＝脱構築のアポリアを明確に述べている。ここで指摘されているような、形而上学の歴史を解体するために用いられる言語の問題は、まさにデリダ自身の問題であったはずである。先述のような「暴力のエコノミー」も、「グラマトロジーについて」における「原－エクリチュール」といった語法も、同じようにこうした円環に必然的に捕われてしまうだろう。したがって、デリダの次の定式化は、まさしく自らの問題を表現したものであるとして読むことができる。

ある遺産の脱－構築のために必要な資源 (ressources) を、その遺産それ自体から借り受ける言説に関して、その資格問題を明確に体系的に提

起ししなければならないのだ。これはエコノミーと戦略の問題である。

(ED414/573)

こうして、デリダの脱構築における資源の問題は、「エコノミー(économie)」および「戦略(stratégie)」という二つのキーワードで語られることになる。このことが直接論じられるのは、1967年に発表された——しかし1966年にはすでに執筆を終えていたと思われる(cf. ED437/607)——テキスト、「限定的エコノミーから一般のエコノミーへ」である。

2 一般のエコノミー

「限定的エコノミーから一般のエコノミーへ」は、1962年に亡くなったジョルジュ・バタイユについてのデリダによるほぼ唯一の論考であり、当然のことながらバタイユ論として読まれている。しかし、デリダの脱構築におけるエコノミー論の生成過程のなかに位置づけるならば、この論考はまた別の重要性をもっている⁷⁾。デリダはこの論考で、バタイユのテキストに寄り添いながら、先述のような脱構築における資源の問題をエコノミーと戦略の問題へと展開しているのである。この観点から、このテキストがエコノミー論の生成に果たした役割を解明したい。

デリダがバタイユにどのような問題意識を読み取っているのかは、本論の早い段階に登場する次の一文に明確に表れている。

哲学の言説を汲み尽くしたのち、ある言語の語彙と構文のなかに、かつては哲学の言語でもあったわれわれの言語のなかに、この共通の論理に支配された概念の対立をそれでもなお超え出るものを、いかにして書き込めばよいのか(ED371/508)。

この問いは、先の資源の問題を受け継ぐものであることは言うまでもない。しかしそれだけではなく、さらにこの問題を先へと一歩進めている。すなわち、解体=脱構築の企てを阻止する形而上学的な言語の回帰に対抗するために、〈形而上学の言語のなかに形而上学の概念を越え出るものを書き込む〉という戦略的問いが浮上しているのである。これは、デリダから見たバタイユのヘーゲル論の戦略として語られるが、後で見るように、これはデリダの脱構築の戦略へと直結するものである。

そこで注目すべきは、デリダのバタイユ論における言語の問題である。バタイユにおいて「至高性」や「非-知」と呼ばれるものは、哲学が用いる「論証的言説」によっては表現することのできないものである。デリダはとくに「至高性」に注目し、この概念がヘーゲルの『精神現象学』において展開される弁証法の過程のなかから抜き出され、新たな機能を付与されたものだと捉える。しかし、「論証的言説」で表現されれば、「至高性」は弁証法のなかで意味づけされてしまう。それゆえ、「至高性」は「論証的言説」とは異なる言語によって語られなければならない。バタイユによれば、そうした言語は、詩的な、恍惚的な、聖なる言語（「詩的で聖なる言葉」⁸⁾）と呼ばれる（ED383/527）。

「論証的言説」と「詩的な言語」の違いは、ひとまず「意味」を基準とすることによって理解可能かもしれない。すなわち、文法的法則にのっとり、論理的な順序に従って理性的に語る「論証的言説」は、端的に「意味をもつ」言語だということである。デリダがしばしば用いるフッサールの『論理学研究』での区別を援用すれば、有意味と無意味・反意味を区別するのは、言語のある種の文法性ということになる。それに対してバタイユのいう「詩的な言葉」とは、言語の文法的規則を破ることで、言語の意味とは異なる何かを表現するものだろう。デリダはバタイユがこうした言語実践に自覚的であることを高く評価しており、「私自身の内部で諸々の従属的操作の作用を破棄するために、私は書いているのだ」（ED391/539に引用）⁹⁾ というバタイユの

言葉を引用して、このことをバタイユの「至高のエクリチュール」(同)と呼んでいる。さらに、こうしたエクリチュールは、ある種の「エポケー」になぞらえられる。すなわち、「意味の名のもとに、かつ意味を目指して行なわれる」現象学的エポケーに対比して、至高のエクリチュールは「意味を還元する」ような還元だとされる(ED393f./543)。

しかしデリダは、フッサールの反意味の文の例も「意味をもつ」と考えたのと同様に¹⁰⁾、詩的な言語も意味をもつものであり、その点で「論証的言説」と別物ではないと考える。「言説はひとつしか存在しないのであり、そのひとつしかない言説は意味作用を行なう」(ED383/527)。すなわち、あらゆる言説は原理的に「意味をもつ」ものであり、論証的言説と詩的な言語はその点で区別不可能である。したがって、至高のエクリチュールとは、「意味をもつ」言説によって「意味を還元する」という逆説的なものでなければならない。「詩的なものや恍惚的なものは、あらゆる言説のうちにあって言説の意味の絶対的な喪失に向けて自分を開きうるものことなのである」(ED383/527)。

「エコノミー」という語が用いられるのは、このことに関してである。言説には、それがもつ「意味」と、「非-意味」への関係という二重性が認められる。デリダは前者、「意味」に関わることがらを、有用性や合理性にもとづく経済活動を対象とする経済学としての「限定的エコノミー」に重ね合わせている。そして言説における非-意味への関係を、バタイユの「一般的エコノミー」と重ね合わせている。

「一般的エコノミー」とは、有用性にもとづかない非生産的な消費を扱う経済学として構想されたものである。デリダが依拠するのは、『内的体験』の註にあるバタイユの次の一節である。

思考対象を至高の瞬間に関係づける科学とは、実際には、そうした対象の意味を互いに関連づけ、ついにはそれを意味の喪失に関係づけて検討

する一般的エコノミー以外の何ものでもない。この一般的エコノミーの問題は、経済学の次元に位置づけられるのだが、しかし、こうした名称で指示される科学は（商品価値に）限定されたエコノミーでしかない。（ED396/548 に引用）¹¹⁾

したがってここで「エコノミー」という語は、デリダによってたんに経済学の意味で受け取られてはいない。すなわち、限定的エコノミーとは、言説における意味の循環を対象とする学として受け取られ、一般的エコノミーとは、意味の循環を破るその外部の非・意味への関係を対象とする学として受け取られているのである。デリダの脱構築の文脈に置き直せば、「意味」の領域である限定的エコノミーの対象は、論証的言説を用いる西洋の形而上学の閉域である。他方、一般的エコノミーは、形而上学の閉域とその外部との関係を捉えるものであり、すなわち形而上学の閉域をその外部へと開く作業としての脱構築のことに他ならない。

ただし、先にも述べたように、二つのエコノミーはあくまで同じ言説が有する二重性に起因する。つまり、あるひとつの言説が、限定的エコノミーのなかでは意味をもつと同時に、一般的エコノミーにおいて非・意味への開けが読み取られうる。そして、あらゆる言説が意味をもつ以上、非・意味への関係もまた、意味を通じて読み取られるしかない。言い換えれば、一般的エコノミーの視点は、限定的エコノミーの外部に立つことはできず、限定的エコノミーの内部からその外部への関係を捉える必要がある。内部から見れば、外部はエコノミー的でないものには見えないうらう。したがって、一般的エコノミーとは、〈エコノミー的なものと非・エコノミー的なものとのエコノミー〉を思考するという逆説的なものとなる。

そうした逆説的なものを思考することは、いかにして可能になるのだろうか。そのためには、戦略が必要である。これについて次に明らかにしたい。

3 戦略の形成

前節で明らかにしたのは、デリダがバタイユのエクリチュールを、言説によって言説を越えたものを表そうとする試みとして位置づけ、それを一般的エコノミーとして捉えたということである。そこから次に、この議論がデリダにおいて、脱構築の戦略として引き継がれていったことを明らかにしたい。

一般的エコノミーの「戦略」とは、エクリチュール=書くことの戦略であるとともに、レクチュール=読むことの戦略でもある¹²⁾。デリダはバタイユにおける至高のエクリチュールを、「言説を超出するものから言説を切り離す何かを、言説のなかに刻印するための唯一の方法」(ED400f./554)と評している。と同時に、そのエクリチュールを読む側にも戦略が要請される。バタイユの至高のエクリチュールは、一見、論証的言説と同じ言語を用いており、したがって論証的な意味として読まれうるものである。しかし、そこには差異が刻まれており、「横滑り」や「逸脱」(ED400/553)を起こしている。したがって、この言説を意味の体系への従属から引き離し、至高性に関係づけて読まなければならない。「バタイユを読むときには、この二つの暗礁のあいだを進んでいかねばならない」(ED401/554)とデリダは述べる。

このようなエクリチュールの二重性にもとづく読解の戦略は、「把捉」と「移送」という二つの語で語られる。「移送」とは、限定的エコノミーから外部へとはみ出すことである。「一般的エクリチュールが用いる諸概念は、それらが対称的な二者択一〔形而上学的な二項対立と同義〕の外に移送され、ずらされる場合にのみ、初めて読み取られる」。しかし、他方でこのはみ出しは、限定的エコノミーを完全に脱することはできず、そのなかに捕らわれたままでもある。「ところが、それらの概念は対称的な二者択一のなかに捕捉されているように見えるのであり、ある意味では、そこに留まらねばならぬものである」。したがって、「戦略はこの把捉と移送の両方を演じる」ので

ある (ED399/552)。こうして、ある言説を、限定的な閉域のなかで意味として読むとともに、そこからの逸脱によって二重に読むこと、デリダはこれを「一般的戦略」(ED407/563)と呼んでいる。「一般的」という言葉が、通常の意味だけでなく「一般的エコノミー」にも由来することは明らかであろう。

デリダはこうした「一般的エコノミー」および「一般的戦略」の観点を、『エクリチュールと差異』の1967年の加筆において、早くも導入している。1963年の「力と意味作用」に67年に加筆された箇所では、「われわれの言説は、形而上学的対立のシステムにどうしようもなく帰属している。この帰属からの断絶を告知できるのは、何らかの組織化、何らかの戦略的配置によってしかない」(ED34/39-40)として、「形而上学的対立のこのシステムをまめかされるひとつのエコノミーを探さねばならない」(ED34/39)と述べている¹³⁾。このように1967年のデリダは、まさにエコノミーと戦略によって自らの脱構築的な言説を展開し始めたのであり、『エクリチュールと差異』の加筆はその形跡として理解することができる。

その後、デリダは数多くの論考を発表し続け、哲学や文学テキストのいわゆる脱構築的読解を幅広く実践する。こうした活動を経て、彼が本格的に「脱構築の一般的戦略」(Po56/59)を語り出すのは、1971年に発表された複数のテキストにおいてである。すなわち、「書物外」(『散種』)の冒頭部、インタビュー「ポジション」(『ポジション』)での発言、「署名、出来事、コンテキスト」(『哲学の余白』)の結論部である¹⁴⁾。これらのテキストからまとめるならば、この戦略は「二重の挙措」もしくは「二重の学問」(Po56/60)を推し進めることからなる。むろんこの二重性は、限定的エコノミーと一般的エコノミーの二重性に対応するものである。

この戦略は「転覆」と「転位」という二つの局面からなる。まず「転覆」の局面とは、形而上学における二項対立が、「ある暴力的な位階序列づけ」にかかわっていることを認めたくえで、そうした序列を「転覆させる」ことである (Po56/60)。パロール／エクリチュールという二項対立を例にとれば、

一次的なパロールと、派生的なエクリチュールという秩序を転覆させ、混乱させることである。この局面は、形而上学の閉域の内部での作業であり、限定的エコノミーに相当する。

次に、「転位」の局面とは、それを外部の他性へと関係づける作業である。それは、「外部の根本的他性あるいは絶対的外部性を、哲学的諸対立の……領野に、闘争的で序列化する閉じた領野に関係づけるあのエコノミー」(Dis11/6)としての「一般のエコノミー」のことである——それは「戦争のエコノミー」(Dis11/6)とも呼ばれる。このことよって、「ある新しい「概念」、すなわち、もはや以前の体制のなかには含みこまれるままにならないものの、かつて一度もそうされるままにならなかったものの概念の、侵入的浮上」(Po57/61-62)が起こる。先の例で言えば、パロールの内部で働くエクリチュールという、新しい概念が浮上する。とはいえ、それはやはりエクリチュールという「古い名」で呼ばれる。むしろ、「古い名を暫定的かつ戦略的に保存する必要がある」(MP392/下 266-267)のであって、こうしてエクリチュールという語は維持されたまま、同時に新しい概念として二重化されることによって、脱構築の効果を発揮するのである。

こうした「限定的エコノミーを一般のエコノミーのなかに書き込みなおす……あの合目的性なき奇妙な戦略」(Dis13/8)、これがこの時期のデリダが定式化した戦略である。

4 エコノミーとしての「差延」

以上のエコノミーと戦略についての思考は、デリダの差延 (différance) の思考にも反映されている。したがって最後に、差延の思考の形成について考察の一端を述べ、こうしたエコノミー論が後期のデリダにいかに関与しているかを考える手がかりを得たい。

そもそも差延という語は、起源的な差異 (différence) によって、起源が絶

え間なく延期すること（動詞 *différer*、その現在分詞形 *différant*）を表す語として表記されたものである。その思想は『幾何学の起源・序説』（1962年）の終章で初めて語られ、その後、同様のことがらを示すときに *différance* と名詞化され、1965年のテキストに初めて登場した¹⁵⁾。起源の延期は、「同の有限なエコノミーにおける差延」（ED366 (1) /501 (12)）と言われるように、限定的エコノミーの内部で生じる事態である。しかし、本稿で辿ったエコノミー論の形成とともに、差延にも二重性が与えられる。すなわち、エコノミーとその外部との関係、つまり一般のエコノミーのことも、新たに「差延」と呼ばれることになるのである。1968年の「差延」というテキストで、デリダは「差延の最大の暗がりの地点」として、「エコノミー的迂回としての差延」と「〈まったき - 他なるもの〉への関係としての差延」の二重性を語っている¹⁶⁾。

一方には同じもののエレメントのうちで、計算（意識的なものであれ無意識的なものであれ）によって差延された現前性の取り戻し、快感の取り戻しをつねに目指すエコノミー的迂回としての差延がある。他方には、不可能な現前性への関係としての差延、保留なき支出としての差延、すなわち取り返しのつかない現前性喪失、不可逆的なエネルギー損耗としての差延、そればかりか死の欲動としての差延、一見したところ一切のエコノミーを妨げる〈まったき - 他なるもの〉への関係としての差延がある。この両者をいかにして同時に思考すべきか。エコノミー的なものと非 - エコノミー的なもの、同じものと〈まったき - 他なるもの〉等々を一緒に思考することができないのは自明である。これこそは自明性そのものである。（MP20/ 上 61-62）

このように、「エコノミー的なものと非 - エコノミー的なもの」を「同時に」思考することは、「一般のエコノミー」の課題に他ならない。差延の語は以

後こうした課題に対応するものとなる。したがって、エコノミーとしての差延は、限定的エコノミーの循環の運動とともに、そのエコノミーの閉域を破るものを含む一般のエコノミーのことである。循環を越えた「濫用 (abus)」を含むエコノミー、それが「差延の「度を越した (=濫用的) エコノミー (économie abusive) 』」(AOP307) である。

以上、(主に 1972 年頃までの) デリダのエコノミー論の生成を、戦略と差延に関係づけて辿り直した。こうしたエコノミー論は、後のデリダの思想においてさらに変貌していくことになるが、ここではその後の展開を辿ることはできない。しかし強調すべきことは、デリダはエコノミーの思考をけっして放棄することはなかったということである。たとえばデリダが後期において、出来事としての贈与や赦しについて次のように語る時、もはや関心はエコノミーではなく、エコノミーを破る贈与の方に向かっていくようにみえる¹⁷⁾。「贈与は出来事であるべきです。贈与は他者からやって来る、あるいは他者へとやって来る驚きのように到来すべきです。それは交換のエコノミー的循環をはみ出すべきです。贈与が可能であるためには、贈与の出来事が可能であるためには、ある意味で贈与は不可能なものとして自らを告げる必要があります」(DEP92/20-21)。

デリダが贈与をエコノミーと区別して特徴づける時、エコノミーの語は循環し、自己固有化する運動として用いられている。それと贈与との関係が問題となるとき、その関係はもはや「一般のエコノミー」としては語られず、むしろ贈与の特異性や絶対性が強調されるかのようなのである。しかし、それは依然としてエコノミーの思考である。というのも、デリダが強調するのは、純粋な贈与そのものは不可能なものであり、エコノミーの中断としての贈与は、エコノミーを通してしか思考可能ではないということだからである。デリダは前期では言説やテキストのエコノミーを語っていたが、後期ではさらにエコノミーを全般化して、法、倫理、政治、経済、宗教……にかかわるさまざまな事象へと拡大し、現代社会の状況を「犠牲の一般のエコノ

ミー」と表現している（『死を与える』）。こうしたエコノミーの全般化を背景にして、贈与や赦し、あるいは歓待といった「不可能なもの」の可能性が探られるのである。

もはや限界なきまでに拡大され、外部なきエコノミーのただなかで、そのエコノミーに侵入し、エコノミーを中断し、破壊さえするものを思考すること、こうしたデリダのエコノミー論の展開を追うことは、グローバル化した現代の世界における間文化的考察にもつながるだろう。

註

- 1) たとえば、「〈エコノミー〉概念の思想史——アリストテレスからピケティへ」（第1特集、主幹・佐々木雄大）『ニュクス』1号、堀之内出版、2015年。
- 2) 彼は晩年の講義録においても、同様の発言を繰り返している。「中国文化においては、音声的要素が認められるとはいえ、書き言葉は表音式ではありません。しかしながら、声に認められる権威があり、声に関するたくさんの記号があります。このことから、私見では、音声中心主義は普遍的なものです、ロゴス中心主義はそうではありません。」（BSI461/428）
- 3) このことを検討するには、たとえば白川静の文字研究を参照する必要があるが、ここではデリダと白川についての次の評言を紹介するにとどめたい。「白川静を必要としていたのはデリダのほうであって、逆ではない。（…）年代的に不可能ではあっても、理論的には『ド・ラ・グラマトロジー』は白川静を参照しなければならなかったのである。もしも参照していれば、文字学はまた新たな相貌を見せたに違いない。」三浦雅士「白川静問題——グラマトロジーの射程・ノート1」『人生という作品』、NTT出版、2010年、58頁。
- 4) 鈴木康則「「暴力と形而上学」における「エコノミー」の問題」2014年11月21日、ジャック・デリダ没後10年シンポジウム・プレセッション（於早稲田大学）での発表。
- 5) 前掲の鈴木氏の発表、ならびに、Edward Baring, *Young Derrida and French Philosophy. 1945-1968*, Cambridge University Press, 2011, pp. 186-189を参照。
- 6) 拙論「脱構築の継承と「言語の問題」——1963-65年のジャック・デリダ」、『終わらなきデリダ』、法政大学出版局、2016年、155-174頁参照。
- 7) この論考も含めたデリダの贈与論・エコノミー論の研究として、ダリン・テネフ「デリダにおける贈与と交換（Derridative）」横田祐美子・松田智裕・亀井大輔訳、『人文学報』511号、2015年、163-187頁を参照。また、異なる観点からではあるが、バタイユからデリダへの継承について考察したものとして、岩野卓司「「真面目な」バタイユ

- ユ——バタイユからデリダへの「継承」について——『言語と文化』10号、法政大学言語・文化センター、2013年、227-241頁を参照。
- 8) ジョルジュ・バタイユ「ヘーゲル、死と供犠」『純然たる幸福』酒井健編訳、ちくま学芸文庫、2009年、227頁。cf. « Hegel, la mort et sacrifice », *Deucalion*, 5, 1955, p.42.
 - 9) ジョルジュ・バタイユ『内的体験』出口裕弘訳、平凡社ライブラリー、1998年、423頁。cf. *L'expérience intérieure*, Gallimard, 1943, p.242.
 - 10) 「緑はあるいはである」という文法を無視した反意味の文であっても、「非文法性の例を意味する」ものとデリダは捉えている (M381/ 下 250)。
 - 11) バタイユ『内的体験』、409頁。cf. *Ibid.*, p.233.
 - 12) ただし、「戦略」は書き手や読み手といった主体の行為に還元されるわけではない。デリダは別の論文のある箇所ですtratégieとstratification(成層化)という語を並べて表記しており(M214/ 下 37)、(両語の語源は異なるものの)層を重ね二重化された道筋をstratégieの語にも含ませている可能性がある。それは主体の行為ではなく、エクリチュールの二重の本性にかかわるものだろう。
 - 13) ロドルフ・ガシエは、この箇所が「ロゴス中心主義の暴露として一般に流布している脱構築理解よりも、おそらくはずっと徹底的な脱構築のあり方を示していると述べているが、この箇所が67年の加筆であることによって、その主張はより説得力を増すことになる。「脱構築〈の〉力」清水一浩訳、『現代思想』43巻2号、2015年、68頁、および原註(2)(71-72頁)を参照。ガシエはエコノミーをオイコスノモス=家政の法、という原義で受け取り、「西洋人としての我々が帰属している居住地のエコノミーの内側から脱臼をもたらす」新たなエコノミーと評している(68頁)。
 - 14) この「脱構築の一般的戦略」についての整理と考察として次を参照。François Mary, « Quel est le sens du projet derridien ? », *Philosophie*, no. 117, Minuit, 2013, p. 55-73.
 - 15) différenceという語の初出は1965年とされているが(「息切れした言葉」の雑誌版に2箇所登場する)、管見によれば、1965年にコロック集に掲載された「[発生と構造]と現象学」の元原稿(1959年のコロックの発表原稿ではない)にもすでにdifféranceという表記がある(MS-C001, box 58, folders 7, Jacques Derrida Papers, Special Collections and Archives, University of California, Irvine)。ただし掲載時には(誤植とみなされたのか)différenceに直され、『エクリチュールと差異』掲載時に再びaの表記に戻っている。
 - 16) この文章が、フロイトの語彙とともに、バタイユの語彙によって語られていることに注意しておきたい。この直後に、デリダはバタイユとの関係を明示している。「私は他のところでバタイユを或る仕方です読解した際に、次のことを指示しようと試みた。すなわち一方には保留なき支出、死、非意味への曝しなどいかなる分け前も与えない「限定的エコノミー」があり、他方には非-保留を考慮=計算し、こう言ってよければ非-保留を保留するような一般のエコノミーがある。この両者を言うなれば関係づけ

ること、…これがどのようなものでありうるかについて指示しようと試みた。」(MP20/上 62)

- 17) 『時間を与える』のデリダの贈与論をめぐる研究として、前掲のダリン・テネフ氏の論文の他、廣瀬浩司「贈与・忘却・制度——制度化の思想としてのデリダ——」『フランス哲学・思想研究』13号、日仏哲学会、2008年、1-12頁、藤岡俊博「待機の贈与——モース・デリダ・レヴィナス」『終わりなきデリダ』、355-372頁を参照。

ジャック・デリダの著作の引用は、次の記号とともに原書／邦訳の頁数を示す。引用にあたっては、できるかぎり邦訳を尊重しつつ、必要に応じて一部改変させていただいた。原文への強調のイタリックは、太字で示した。

AOP: « Avoir l'oreille de la philosophie », Lucette Finas, Sarah Kofman, Roger Laporte, Jean-Michel Rey, *Écartés. Quatre essais à propos de Jacques Derrida*, Fayard, 1973.

BSI: *Séminaire La bête et le souverain I (2001-2002)*, Galilée, 2008. (『獣と主権者 1』西山雄二・郷原佳以・亀井大輔・佐藤朋子訳、白水社、2014年)

ED: *L'écriture et la différence*, Seuil, 1967. (『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年(新訳))

DEP: « Une certaine possibilité impossible de dire l'événement, » Jacques Derrida, Gad Soussana, Alexis Nouss, *Dire l'événement, est-ce possible? Séminaire de Montréal, pour Jacques Derrida*, L'Harmattan, 2001. (「出来事を語ることのある種の不可能な可能性」西山雄二・亀井大輔訳、『終わりなきデリダ』斎藤元紀・澤田直・渡名喜庸哲・西山雄二編、法政大学出版局、2016年)

Dis: *Disseminations*, Seuil, 1972. (『散種』藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2013年)

DG: *De la grammatologie*, Minuit, 1967. (『根源の彼方へ グラマトロジーについて』足立和浩訳、上巻、現代思潮社、一九七二年)

HQE: *Heidegger: la question de l'Être et l'Histoire. Cours de l'ENS-Ulm 1964-1865*, Galilée, 2013.

MP: *Marges – de la philosophie*, Minuit, 1972. (『哲学の余白』高橋允昭・藤本一勇訳(上巻)、藤本一勇訳(下巻)、法政大学出版局、2007-2008年)

Po: *Positions*, Minuit, 1972. (『ポジション』高橋允昭訳、青土社、1992年(増補新版))

